

第十一章

フェミニズム

——ギッシングと「新しい女」の連鎖——

太田 良子



エミリ・ファーマー『迷いつつも』（1905年）
「目を伏せ、胸には忘れな草の花束、意に沿わぬ結婚なのだろう」

第一節 メアリとファニー



図① メアリ・キングズリー (1899年)

メアリはジャングルに行き、男みtainなズボンでなく、女らしいロング・スカートをはいたおかげで命拾いした。

「新しい女」^{ニュー・ウーマン}とは、十九世紀のイギリスに従来の結婚観などから距離を置いた「新しい」考えを持つ女性が出てきた社会現象に概念をとり、さらに女権拡張志向を取り込み、やがて『パンチ』の常連となり、「新しい女」小説と呼ばれる小説群を多数残し、新旧二つの世紀の変貌の一面を伝える役割を果たした呼称である。一八九〇年代に二度のアフリカ旅行を敢行したメアリ・キングズリー(図①)は、「私は〈新しい女〉と呼ばれるのを好みません」と言い、また、女医を初めて見たさる博士が「医業が女向きの職業だとは思いませんしね。私個人としては、男っぽい婦人というのは嫌ですよ」と言うのはコナン・ドイルの『バスカヴィルの犬』(一九〇二年)の一場面である。

擲論をこめたこの呼称が正式に登場したのが一八九四年前後とはいえ、十八世紀に相次いで起きたアメリカの独立とフランス革命は全世界を揺るがし、新旧の交代が社会のあらゆる面で起きたことは言うまでもない。そしておよそ「新しい女」と言うとき、メアリ・ウルストンクラフトの名を忘れるわけにはいかない。すなわち、女性に男性の快楽のために造られた「玩具」であるとするルソーの女性蔑視の言説があり、『エミール』(一七六二年)を愛読しながらも、このルソーに反発したメアリは、人権における男女の平等を訴え、よりよき社会の実現には女性の教育が不可欠と説き、『女性の権利の擁護』を一七九二年に出した。

女性を解放せよ。そうすれば、男性がますます賢明で有徳になるのと同じように、女性も速やかに賢明で有徳になるであろう。何故かという、男性と女性は、手を取り合って進歩しなければならぬからである。さもないと、人類の半分である女性が耐え忍ばねばならぬ不正は、抑圧者である男性の上にも跳ね返ってくるのであって、男性の美德は、獅子身中の虫によって蝕まれるであろう。

いち早く産業革命を経験したイギリスに生まれ、フランス革命に共感し、最初の夫がアメリカ人だったこのメアリによって、イギリスのフェミニズムは理論的な基盤に立ったとされ、「新

「新しい女」はひとまず「解放された女」として、フェミニストとともにその存在が浮上してくるものの、隣国フランスの革命は国王処刑に続いて恐怖政治へと激化し、対仏・対ナポレオン戦争に突入したイギリスは改革よりも保守路線に傾き、男女同権思想は後退した。その後、『種の起源』（一八五九年）の激震にくわえてダーウィンはさらに「性の選択」で男女の差異を理論づける一方、J・S・ミルは『女性の隷従』（一八六九年）を出して、「男女の差異の本質は、ただ全く社会的に決定されたもの」とするにいたる。

こうして十九世紀の初めには兆していた「新しい女」の問題は、オースティン（図②）の『マンスフィールド・パーク』（一八一四年）の中でささやかな波風を立てている。その第三十章、サー・トマス・バートラムとファニー・プライスが交わす対話のシーンがそれである。この章は「愛情と結婚」をめぐる作者の結婚哲学の核心をなすものであり、対話とはいうものの、ヘンリー・クロフォードの求婚に断固として応じないファニーは「ノー」の一点張り、いきおいサー・トマスの独演となる。

私としては、とくに君は、わがままな気性や、自惚れや、近頃の若い女性にすでに蔓延している精神の独立（independence of spirit）とかいうものを求める傾向には、一切染まっていないと考えていたし、そういうものがある若い女性は、私には不愉快



図② 姉カサンドラによるジェイン・オースティンの肖像画に基づいた版画（1870年）

快で、腹立たしくもなるから、不愉快どころではなくなるがね。

むろん準男爵たるサー・トマスには伝統遵守の使命と従順を求める古来の女性観があり、妻レディ・バートラムの発言をかねて封じてきた男だから、なるほどアメリカは「独立」したかもしれないが、「わがままで自惚れている」だけの「近頃の若い女性」が「精神の独立」とやらにうつつを抜かすなど、片腹痛いだけである。前後の事情も知らないノリス伯母までもが、「ファニーは……幼稚なくせにその精神には秘密とか、独立とか、たわごとが詰まっているのよ」と言つて、「精神の独立」

を持ち出す始末。つまりこの二人は、従順であるべきファニーが思いどおりにならないことに驚きあきれ、「精神の独立」などことさらに言い立てて牽制しているのだ。アメリカは独立、フランスでは革命という世の中、ことにイギリスで「新しい女」が歓迎されなかったのは、マンスフィールド・パークだけの偏見ではなかっただろう。

一方、当のファニーは「精神の独立」は聞き流したが、サー・トマスがつい「君は恩知らずだ」と口走ったときにショックを受ける。「経済の独立」のないファニーには精神も独立も自由もない、という彼の本音が出たわけである。ファニーにとつての問題は、「何をしてでも必ずそこに悪が付きまとう」ヘンリーとの結婚は論外のこと、彼の求婚に絶対にイエスとは言えない、その一点である。しかも、ヘンリーの邪悪な正体をサー・トマスに理解してもらうには、サー・トマスの留守中にヘンリーが芝居の稽古にかこつけて見せた火遊びについて話さねばならず、それを話せばその相手をしたマライアの不品行に触れることになる。もちろんそれは伯父を裏切る「恩知らずな」言動であり、それも絶対にしてはならない、というのがファニーの沈黙のもう一つの理由だった。ファニーは「君は恩知らずだ」という言葉に困惑し、「新しい女」の問題はその沈黙の中に消える。

では、ファニーが「精神の独立」とは縁のない「古い女」かという、それは違う。ファニーは思索の大半を内的独白で語

るが、「ヘンリーを好きになるはずはないから彼との結婚はあり得ない」という一点だけは、明確に言葉に出して主張する。当時、傾いた実家を救うとか、独身で貧乏するよりはマシという経済的結婚——『余計者の女たち』（一八九三年）のモニカの結婚、社会の梯子としての偽善的・俗物的結婚——『流謫の地に生まれて』（一八九二年）のゴドウィンとの結婚、駆け落ち婚——『高慢と偏見』（一八一三年）のリディアの結婚、または妊娠などの背德的結婚などが、結婚の大半を占めていた風潮の中、男女の愛と合意に基づく結婚の神聖を信じるファニーの「強い」精神力は、サー・トマスが不愉快だと言つて一蹴した「精神の独立」のまぎれもない相關物ではなかったか。そこには、愛情のない結婚をするくらいなら汚れなき独身を通ず、という作者の哲学がこめられている。ファニーのこの「精神の独立」は、メアリ・ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』で他に先駆けて掲げた男女同権思想、すなわち基本的人権に相通じるものである。この「精神の独立」が「新しい女」の条件なら、ファニーのみならず、オースティンのヒロインたちはみな「新しい女」であると言えよう。

第二節 心から体へ

「新しい女たち」が家庭の天使神話の偽善や紳士たるべき夫の欺瞞に気づき、家庭の外の世界に憧れ、夜の街を徘徊する、

アルコールに手を出す、といった身体行動で語ることに着目し、これをヒステリー、不眠、狂気といった「女の病」と見て世紀末を論じる向きもあるけれども、メアリ・ウルストンクラフトは最初の夫イムレイの浮気沙汰などで自殺未遂を繰り返しているし、彼女と彼の間に生まれた長女ファニーが孤独な人生の果てに毒物を飲んで自殺したのが一八一六年、ゴドウィンとの間に生まれたメアリが、シェリーの妻が入水自殺のあと正式にメアリ・シェリーとなり、病んだロマン主義の落とし子『フランケンシュタイン』を書いたのは一八一八年だった。一八一四年の『マンスフィールド・パーク』もそのあたりの不穏な空気と無縁ではあり得ない。

先にも触れたように、絶対君主であるサー・トマスは、妻が発言するとそれを「すぐさま改良」したり、「遮る」ので、レディ・バートラムはつとに現実を見失い、まるで阿片吸引者のような言動しかできなくなっている。ファニーの場合は、『^{ブラッシュ}頬の紅潮』である。『高慢と偏見』では、エリザベスの白い頬が朝の原野の歩行で紅潮し、ミスタ・ダーシーの心を捕らえた。また、ミスタ・ダーシーの奔走によって転落女の不名誉を免れたあと、平然として実家にもどった妹リディアを見て、エリザベスとジェインは思わず頬を赤らめている。それから下ってファニーになると、頬の紅潮はさらに深刻である。それは内面のジレンマと密接に係わり合い、言葉にならない煩悶が外に出た、まさに身体言語になっている。さらにファニーには『東の部屋』

があつて、従兄妹たちの言動やノリス伯母の理不尽さについて、または金の鎖や兄ウィリアムのことを考えたいとき、彼女はいつもここへくる。『東の部屋』は、ファニーにとって瞑想と認識の場であり、分別を取り戻す緩和剤だった。彼女はこの部屋のおかげで、アルコールや睡眠薬や夜の街の徘徊を知らずにすんだと言える。だがファニーは無垢とはいえ、ヘンリーが「ロンドンで心の悩みを癒す」男であることを察知していた。その同じヘンリーが、ファニーの愛する兄ウィリアムを海軍少尉に昇進させてくれた恩人であつたとは。

このジレンマを前に万策尽きたファニーの頬は、深い紅に染まる。ところが、以前にはヘンリーが、いまはサー・トマスが、それを無垢な若い娘ゆえの恥じらいととっている。サー・トマスの場合はファニーの成長のための試練と映じる一方で、ヘンリーの場合は、彼が妹のメアリに請合つたときは、ファニーの「心」を射止めるゲームだったものが、つぎの第三十三章の冒頭にあるとおり、サー・トマスの意になつた正式な求婚というマナーの裏で、誰にも「占有された」ことのない「心と体(mind and person)」を落とす勝利の快感に変わっている。それだけでなく、ファニー陥落のプロセスを妹メアリと姉のミセス・グラントに目撃させ、さらに卑しい興奮を食らうとしている。どうやらヘンリーの原型はラクロの『危険な関係』(一七九二年)にあるようだ。つまり、清純な処女を娼婦に変え、貞淑な人妻を陥落する、というモチーフが小説芸術の一方の極致

であることを『危険な関係』が示して以来、ことに十九世紀の作家たちにとって、純潔（貞節）を守るか守らないか、言い換えれば、「愛・心」と「性・体」で、ヒロインたちが二分された。「金髪」と「黒髪」、あるいは、「聖女」と「娼婦」に分かれる明暗二人のヒロインがそれである。ここではロンドンを知っているメアリがファニーの対極にいる。ヘンリー・ジェームズが『デイジー・ミラー』（一八七八年）のヒロインに「浮気娘（firt）」と「無垢な娘（innocent girl）」の両面を秘めたのもその一例であろう。むしろギッシングも例外ではなかった。彼のヒロインたちも時代の成熟に連れて必然的に「心」と「体」に分裂する自己認識のもと、ファニーは免れえた「危険な関係」に遭遇することになる。

「新しい女」という視点で『マンスフィールド・パーク』を見てくると、ここにある「近頃の若い女性」がやがて「新しい女」にいたる見取り図の中にあり、またそこに「新しい女」がやがて直面する運命の暗示があつて、ギッシングの小説を「新しい女」というコンテキストで読む段取りが見えてくる。小説が社会の矛盾や激動を市民に示すもつとも有効なアートとなつた十九世紀、「新しい女」はその矛盾と変化の記号として、作家のヒロイン造型の意欲を揺さぶつたのだ。ギッシングの『流滴の地に生まれて』（一八九二年）では、主人公のゴドウィンが早々に「俺は解放された女なんて、大嫌いだ！」（第二部第一章）と言ひ、『余計者の女たち』になると、ヒロインのローダは自

他ともに認める「新しい女」なのに、相手役の男はその冷たい手に触れて彼女を「処女」と見なし、密かに「危険な関係」を目論んでいる。他方、結婚した「古い女」はどうかというと、ローダの助言をよそに結婚したモニカや、『渦』（一八九七年）のヒロインのアルマたちは、夫に飽き、夜の都会を歩き、姦通に惑わされ、それでも満たされぬ懊悩によつて心身を病んでいく。結婚した「古い女」たちは、これらの「新しい」経験と、身体言語という「新しい」宿命によつて、皮肉にも「新しい女」の連鎖に連なっていく。

オースティンは不幸を書くのは他の人に任せようといったが、むしろ不幸を知らなかったわけではない。彼女がわざと書かなかったその不幸が、「新しい女」に次々と降りかかる。メアリ・ウルストンクラフトから百年、ファニー・ブライスから八十年余を経た十九世紀末、ギッシングはそれを主題に据えて相次いで小説を発表した。彼女たちがどのような変化をくぐつたのか、ギッシングは彼女たちの変貌をどのように書き留めたのか。

第三節 「解放された女」

『流滴の地に生まれて』の時代設定は一八八〇年代、すなわち後期ヴィクトリア朝に置かれている。当時のイギリス社会は、「女性の役割は、そして女性の権利はどうなったのか」に進展

が見られぬまま、「自^{セルフ・ヘルプ}助^{オヤクク}」や「美德^{リスペクティブ}」や「品^{リスペクティブ}性^{リスペクティブ}」という『ヴィクトリアニズム』の本質をなす要素が疑問視されはじめ、このような資質の現われとしての勤勉、節制、儉約という行動が攻撃的になり出した」という風潮がその現実だった。また、「福音派も国教会カトリック派も、十九世紀の科学の発展を恐れていたという点では一致していた。……そして十九世紀のリベラルな努力と手を携える道を模索したのは、高教会でも低教会でもない第三の宗派、広教会であった⁽¹⁰⁾」。本書の主人公ゴドウィンが聖職者たらんとして採ったこの広教会とは、「理性の意義を十分に尊重する姿勢をとる人々」を引きつけ、コールリッジやマシユー・アーノルドがその代表だったという⁽¹¹⁾。

本書についてジョン・スローンは「十九世紀の知的生活の錯綜ぶりを捕らえた傑作」(Sloan 104)と評し、ジェイコブ・コールグはこれをドストエフスキの『罪と罰』(一八六六年)やツルゲーネフの『父と子』(一八六二年)に並べた事例を伝えている(Kog 1415)。また、マイケル・コリーは十九世紀末のイギリス社会に兆した深刻な変化を「ヴィクトリア朝の不安」と呼び、その結果として「ニヒリズム」が蔓延し、ヴィクトリア朝の特徴である「偽善」がさらに度合いを深めたとし、この小説を「当時を描いた主要な人間ドキュメント」(Collie, Allen Art 127-28)と位置づけている。さすがの繁栄に影が射しはじめた後期ヴィクトリア朝にあって、主人公ゴドウィン・ピークは本書の第一部と第二部で発作的にとった行動の結果として、過去

を隠し、真意を隠し、ことあるごとに心の中で自己正当化を繰り返す「偽善者」となって生きることになる。こうして彼は、「大衆に代わって語るのではなく、例外的な男、感受性のある男、野蛮人の中で孤立した男に代わって語る」ギッシングのヒーローの一人として、さらに「下層の生まれながら教育があり、社会のどこにも居場所のない青年」⁽¹²⁾を代表する視線を新たに帯びて、後期ヴィクトリア朝という最も興味深い時代のすぐれた証人となるのである。

ゴドウィンの問題行動の第一は、コックニー丸出しの叔父が大学の前に軽食堂を開き、「ピーク」という大きな看板を立てると聞いたとき、ただちに退学したことである。下層の家に生まれた身分を恥辱とし、学問に優れた自分だけは突然変異の貴種であるとする彼の自負心は、猫飯屋に等しい叔父の看板は、とうてい正視できないものだったのだ。

少年時代のゴドウィンは、「美しい若い女はまるで絵巻物のようで、見ただけで理由のつかない絶望感」に圧倒される一方、「少女」のすべては「憎悪」の対象であり、「既婚女性と未婚の中年女性」は「蔑視」の対象だった。そして、「二十四歳を過ぎると、金で買う快樂が克服できるようになり、孤独な青年にはあまり類を見ない禁欲的な生活を送った」(第二部第二章)。つまり彼は、若き日の肉欲に負けるという過去がなかった代わりに、階層意識に縛られた学業放棄という汚点を抱えて行動することになる。

そして一八八四年、ロンドンに出て化学工場で働く身となったゴドウィン^{ゴドウィン}は、大学以来の友人で、いまはロンドンでジャーナリストとしての将来が見えてきた、適者生存理論の見本のようなジョン・エリカとの語らいで次のように発言している。

俺の至高の望みは、完璧な洗練に達した女性と結婚することなんだ。正確な言葉で言うよ。俺は平民だが、レディと結婚することに狙いをつけた。……俺が心に描いているのは、我々の文明が生み出しうる最高のタイプの女性だということを、どうか覚えていてほしい。

(第二部第二章)

学業放棄の土台にあった劣等感^{スプレ}は、いまや「レディ」と結婚して「平民」を脱するという俗物の上昇志向になって、彼の心を占めていることがわかる。マンスフィールド・パークから里帰りしたファニーは、ポーツマスの実家にはもう自分の居場所はないと感じている。このファニーの焦燥がゴドウィンには痛いほどわかったことだろう。

そんな彼の前に二人の女性が登場する。マーセラ・モクセーとシドウェル・ウォリコムである。両親を亡くしたマーセラは、ロンドンで兄のクリスチャンと二人暮らし、シドウェルはゴドウィンの学友だったバックランド・ウォリコムの妹で、父は俗物ながら地方の名士である。二人とも経済的にもゆとりのある中流階級に属しているものの、マーセラは器量が悪くシドウェル

は美人という相違があり、ゴドウィンはマーセラにあうたびのこのことを意識する。

女性の外観に対する彼の執着には、優生学や適者生存といった進化論の時代の感化、人相が内実を現わすという骨相学や観相学への関心、さらに犯罪学からシャーロック・ホームズにいたる当時の社会の熱狂が背景にあることを思わせる。またイギリスの上層階級が、言葉や体格や容貌の点で、一見して下層階級とは著しく異なっている事実、つまり「二つの国民」という実態が背景にあると考えられる。

「俺は解放された女 (emancipated women) なんて、大嫌いだ!」(第二部第一章) とゴドウィンがマーセラを指して言うのは、夕食に招いてくれた彼女の自宅を出た直後だった。対話の相手のエリカも同じ言葉を繰り返し、さらに「女は啓蒙されて (enlightened) もいけないし、独断的なものもいけない。女はセクシャルであるべきだ」と続ける。ルソーのように、女は女でいい、と言うのか。そしてゴドウィンは、「ミス・モクセーは耐えがたい。自分でもよくわからないが、なぜか好きになれないだけでなく、知れば知るほど、反感を覚えるんだ。あの人には、女らしい魅力がひとかけらもない——ひとつもないね」と言い、この観察の真意は後日明確になるにしろ、マーセラを見る彼の目は終生変わらない。

その彼はシドウェルを一目見ただけで心惹かれ、「美しい娘だ」と二度もつぶやき、さらに「甘美にして威厳があり、物腰

はさらに控え目で、さらに優雅」と褒めたたえる。かくしてシドウェルは上に見たゴドウィンの理想の「女らしい女」となり、彼が狙い定めた理想の人生の相関物となる。「平民」が「レディ」と結婚し、「彼自身の生物学的な家系をウォリコム家に移植」(Goode 80) すべて、彼は第二の問題行動に出る。

『流滴の地に生まれて』の第二部第四章は、その問題行動、つまり、急進主義を標榜してきたゴドウィンが聖職者になると宣言するにいたる一章で、その決断の重さのために訪れた、眠れぬ夜で幕を降ろす前半のクライマックスである。エクセターを訪れ、蜜蜂の羽音に心を洗われ、バックランドの招待によって憧れのウォリコム家の居間に座を占めながら、ゴドウィンは、眼前に開けた「女性の社交」に目を奪われつつ、「解放された女」と「レディ」について比較している。

因襲的な女たち——だがこれは同意語反復ではないか？ 魂を自由にした少数の女は、必然的に女性を犠牲にしたのだから、この先の長い年月、そのまま女性ではなくなるのではないか？ その一方で、シドウェルのような女は完成された存在であり、人間進化が到達したある一定の段階で完成の域に達した存在なのだ。彼女を一目見るがいい。そこに座ってムアハウスと対話している、蠟燭のほのかな光を顔に受けて。彼女を、解放された並みの女と、人民の娘と比べてみたまえ。前者のなんと物足りなく、後者のなんとむかつくことか！ ここにあるのは絶妙

なる中庸にして、このレディこそ十九世紀末のイギリスが完成させたものなのだ。
(第二部第四章)

「因襲的な女たち (conventional women)」が同意語反復とは、どういう意味か。「因襲」と「女」は同じだ、というのである。「魂を自由にした (liberated) 女」が代償として犠牲にした「女性 (woman)」は生涯失われるから、「解放された女」は完成された女性像としての「レディ」に到達することはない。「解放された女」とは「因襲」から「解放された」ことを指し、したがって「解放された女」とは、語の矛盾であり、「女性」ではない存在として、ゴドウィンの目に映じていたことがわかる。彼が「因襲」から「解放されない男」であることが判明し、同時に、あのサー・トマス・バートラムの女性観が彼の中にもしぶとく生き残っていることが明らかになった。ウォリコム家ではとくに例の「二重の意識」で武装していたはずのゴドウィンだったのに、彼が本心を隠していることをシドウェルの妹のファニーは見抜いていた。「社交儀礼が介在すると、誰も誠実にはなれない」と言うファニーは、シドウェルより解放されていたのか、ゴドウィンの偽善を嗅ぎつけている。

ゴドウィンがウォリコム家で目の当たりにした「広く美しい部屋」、「適度に贅沢な趣味が随所にしのばれる寝室」、そして「蠟燭のほのかな明かり」等々は、「文明が生んだ最高の成果」として彼を圧倒し、ついに彼はバックランドに向い、「近く聖

職につきたいと思っている」(第二部第四章)とつぶやいていた。そのとき、ひとときわかるい流星が夜空を走る。やがて寝室に引き取った彼は、急進主義を貫いてきた我が身が、まことしやかに嘘をつき、偽善を装ったことが重圧となり、「堕ちてゆく、堕ちてゆく」という自嘲の叫びを上げる。進化論に触発され、母と通った教会を捨てて無神論を信条とし、聖書と科学は矛盾しないという場当たりのな護教論の矛盾を暴いた「新ソフィスト論」を書き上げていた、そのゴドウィンが、国教会の牧師になろうとする。それはすべて、下層階級を脱し、「文明が生んだ最高の成果である」中流階級に安住するため。シドウェルと国教は、彼がその手段として選んだ対象にすぎない。

一八九一年には脱稿していた『流滴の地に生まれて』が、出版社を盥回しになっている間に、ギッシングは改訂を思い立ち、おもに視点人物をゴドウィン一人から多数の人物に移すことに腐心した。コリーはこの指摘にくわえて、とくにマーセラとシドウェルに独自の視点を与えたことに大きな成果があったとしてくる (Colle, *Allen* 141)。

「新ソフィスト論」が『クリティカル』誌に掲載されたのを契機として、ゴドウィンの偽善が明るみに出るや、マーセラとシドウェルは認識の変化を迫られることになった。マーセラは生まれつき聡明で、女学生だった頃から良家の子女である学友たちを馬鹿にして、「民衆派支持の過激な意見」を振り回し、成人したあとも読書中心の独学で広範な知識を獲得し、並み居

る男たちを圧倒していた。そのマーセラにとってゴドウィンは「運命の男」だった。そこに自分の分身を見たマーセラは、美しいシドウェルがゴドウィンに意味するものを理解した上、彼の偽善の根底にある「貴族性」を救うべく、自分の財産の大半を贈る申出をし、その後事故死する。ゴドウィンは終生嫌悪しつづけた「解放された女」に救われ、マーセラのほうは皮肉にも、報われぬ愛に殉じた乙女というオフィーリア以来の「古風な女」の伝統に組み込まれて生涯を閉じた。

一方、シドウェルがゴドウィンの視線から独立するには、彼の嘘を兄の口から直接聞くまで待たなくてはならなかった。それは皮肉にも真実の愛を覚えたゴドウィンが、ついに彼女に求婚した直後のことだった。兄が投げ捨てていった「新ソフィスト論」を前に、彼女はこの偽善に隠された彼の本心を探ろうとする。宗教も見せかけなら、愛情も見せかけだったのか。ここで彼女は「新ソフィスト論」をあらためて読み、イギリスの社会がごぞつて「心にもない信仰を奉じている」のは、隠しようもない事実ではないか、として、時代の新しい認識へと目が開かれていく。その後彼女は「自分のことは自分で決める権利がある」と父に主張してゴドウィンに会い、彼に向かって次のように言う。

あなたが適合しようとしてきた世界は、本来のあなたには向かないものでした。あなたの居場所は、新しい秩序の中にある

のよ。古い秩序に逆戻りすることで、あなたは空しい人生に自分を追い込んでいたんだわ。……あなたはここを出て、あなたと同等の人たちと交わり、未来のために働いている人々とともに、その一翼を担わなければ。

(第五部第四章)

この言葉によって、ゴドウィン の偽善は完全に空中分解してしまう。彼女が「新しい秩序 (order)」そして、「未来」と言うとき、それは因襲の向こうに見える世界のことであり、それこそが「解放された女」の視線が捕らえていたものだった。つまりシドウェルはここで図らずも「解放された新しい女」に変身して彼の偽善を粉碎し、自ら再生したと言えるだろう。彼女に返したゴドウィンの台詞、「あなたのいるところが僕の世界なのです」は、通俗ロマンスのヒロインが言う殺し文句のようで、このどんでん返しには思わず腰が引けてしまう。ときどき見つかるといふ隙間風であろうか。マーセラもまた、「私たちはいつも世間の因襲を軽蔑してきたわ。だから、そんな因襲に囚われて、言いたいことを言わないなんて、おかしいと思うの」と言っていて、遺産の譲渡の説明をしていた。「因襲」と「女」を同意語としていたゴドウィンに、この言葉はどう響いたのだろうか。「因襲」から「解放された女」が見ていたのは、かくも自由な境地だったとは。それは、階級意識の奴隷には到底見えない新しい世界だった。シドウェルはその後、ゴドウィンの求婚を断り、父の

屋敷の屋上にある小さな部屋で、水彩画を描く「レディ」にもどる。ゴドウィンの階級闘争は失敗した、と見るほかない。この作品で、「解放された女」すなわち「新しい女」を後期ヴィクトリア朝の病というべき「偽善」を映す鏡として、また偽善が巻き起こす大小の渦を解説する鍵として用いたのは、ギッシングの慧眼だったと言わなければならない。

第四節 余計者の男たち

ところでシドウェルは、二十八歳の誕生日に友人のシルヴィア・ムアハウスに宛てて次のような手紙を書いて、さらに「新しい女」に近づいていた。

昨日は私の誕生日でした。二十八歳になりました。……でも、残念なことに、私は真剣に取り組む仕事をしたことがないの。あまり明るくない見通しだわ、きつとこの先もまた二十八年間の優雅な空き時間なんて——それは鬱陶しい怠惰ということですよ。私に何ができるのかしら？ 私のために何か仕事を考えてくださらない、一生涯続けられるような仕事を？

(第六部第四章)

こう書いたとき、シドウェルは次なる「新しい女」、ローダ・ナンの登場を告げていたことになる。「仕事」が女性の途上に

見えてきたからである。ところでゴドウィンがマーセラからもらった遺産は年収にして八百ポンド、十九世紀がまもなく終わる、二十世紀に入っても戦争が始まるまでは、独身で暮らすには十分すぎる額と言えるだろう。ときどき海外に出かけ、ロンドンのメンズ・クラブで葉巻をくゆらし、サヴォイ・オペラを見る、といった夢の生活ができる。しかしこれは、シドウェルが恐れていた「優雅な空き時間」と「鬱陶しい怠惰」そのものではないのか。夫になったゴドウィンを想像すると、仕事がないので在宅しがちになり、妻のシドウェルを「レディ」という「因襲」で縛るかもしれない。マーセラの兄クリスチャンも、女医となった従妹のジャネットと結婚しながら、結婚後は彼女の体力不足を理由に女医を辞めさせようと考えている。

とところでイタリアでゴドウィンが患った病気は、本当に熱病だったのか。ギッシングの場合、ヒーローのほとんどが若い肉欲に負けて行きずりの女を拾い、貧乏は厭なのに汗を流すのを嫌い、誰かが死んで降ってきた遺産によって安楽な生活に入り、それでどうにか結婚する。そしてその安楽な環境を壊されたくないばかりに、「新しい女」を敵視し、まことしやかな理由をつけて攻撃する。これこそまさにゴドウィンが、そしてイギリス社会がこぞって隠蔽してきた偽善のシナリオだったのではないか。静謐で内省的な『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年）の語り手ライクロフトも、晩年に奇特な友人の遺産で入った年収三百ポンドのおかげで、四季のうつろいが美しい

エクセターで夢の田園生活に浸っている。もはや女性には何の用もなく、「我が家の家政婦」つまり「古風な家政婦」がいるだけでいい。名前も不明なこの家政婦が、お茶やジャガイモ料理を持って書斎に入ってくるときが至福のひとつとき、おまけに彼女はパン焼きの名手。そして彼のこの言葉、「いかなる階級の娘であれ、完全なパンを焼き上げられる能力を立証できない限り、結婚して人妻となることはまかりならぬ制度」が作られたら、「この騒然たるイギリス」に「栄光ある革命がもたらされる」（『冬』第十一章）である。イギリス紳士の理想は「パンのみにて生きる」ということだったのだ。

このからくりを見破る「新しい女」こそ、『余計者の女たち』のヒロイン、ローダ・ナンその人である。ローダは自分で選んだ仕事を持ち、「経済の独立」と「精神の独立」を我がものとして、遠くはフアニーの、いまはシドウェルの希望を実現させ、しかも長身で知的な魅力にあふれた外観を持つ「自立した女性」となっているからだ。彼女はさらに、貸し本屋から借りてきたロマンス小説ばかり読む馬鹿な女を冷笑する一方で、男性の「性的な衝動」をつねに別問題として触れようとしない三文小説家どもの欺瞞を衝き、「あの連中は、ためになる真理は一つも言わない」と喝破し、かつ、「すべての男性は事実上、独身者ではない」と断言し、「誰も口にしない事実がある」（第六章）として、ヴィクトリア朝男性の性生活に切り込むギッシング初



図③ ギュスターヴ・カイユボット『ヨーロッパ橋』(1876年)の一部。通りすがりの女性を値踏みするフラヌール。このあと二人がどうなろうと、その関係は文字通り「行きずり――passing」のもの。

近年の『余計者の女たち』研究では、モニカ・マドン・ウィドソンに関心が集まっているようだが、彼女は一八五〇年前後から顕著になった「女余り現象」で男にあぶれた、いわゆる「余った女」ではなく、年収六百ポンドに釣られてむさくるしい四十男と結婚した女である。おかげで高価な衣裳を着せてもらいながら、いつも在宅している夫を嫌って「ストリート・ウォーカー」(図③)になったことから、世紀末と大都会ロンドンという二大記号装置を読む記号解読者という顔が新たに認められ、注目を集めたのだ。

都市を徘徊することが男だけの楽しみではなくなった現象は興味ある問題を種々含んでいるというものの、エマ・リギンズによれば、女のストリート・ウォーカーは往々にして「売春

婦という、男の好意と金を当てにした存在」(J'egains 102)とみなされた。父が医者だったモニカはたしかに下層の生まれではなく、売春婦まがいのような売り子仲間と共通点はないという自負があったとはいえ、ウィドソンと出会ったのは一人で街を歩いていいたからであり、彼と結婚はしたものの、「男の好意と金を当てにする存在」にかわりはないから、彼女をここで

「新しい女」と呼ぶわけにはいかない。「都会の自由を得た女は、男の目にはつねに、性的な含みと、品格の欠如と映じる」(23) だけなのである。

正式に「新しい女たち」の一人と呼ばれる初めてのヒロインとして登場したローダは、死んだ母が残した少額の金をもとに、専門知識もないままに教えるのが苦痛だった教師を辞め、ブリストルに出て速記や簿記を習い、大商店の出納係に就職した。そのあと、広告を出してバースで事務職につき、ロンドンに近づくには必須の技術と見たタイプを習い(図④)、ロンドンにあるその事務職訓練学校の経営者であるメアリ・バーフットに優秀さを認められ、いまは彼女の右腕となって同校の経営に当たっている。三十歳になったいまはメアリの住居の一角に暮らしていて、大きな本箱と書き物机のある部屋には、切り花をかけた花瓶がいくつかわざわざ置かれ、よい香りが辺りを包んでいる。このローダの転職の軌跡は、女家庭教師に始まった「新しい女」の仕事の歴史そのものであり、そこには二十世紀が目前に迫った社会が見える。ファニー・プライスが使っていた「東の部屋」



図④ タイプの学校（1914年頃）
もと応接間が今はタイプの教室。右端にはミス・パーフットのような校長先生らしき女性。

は、ようやくローダがロンドンのチェルシーに持った自室、「自分だけの部屋」となった。一八九〇年代に入ると、「新しい女」小説の守備範囲は労働者階級から中流階級に移りはじめる。リギンズは、「中流階級の働く女性が、結婚という誘惑に直面しながらも、独身を守ろうとして葛藤する、その社会現象をドラマにすること」(Liggins 105) がギッシングの意図であるとし、「自立した人生を模索する女性たちの戦い」が本書の主題であるというギッシング自身の言葉を上げている(106)。

ローダの前に現われるエヴァアラードはメアリ・パーフットの十歳下の従弟で三十三歳、父親は下層の出身から中流階級にのし上がり、二人の息子を紳士にすべく教育した。長男のトムは従順だったが、次男の彼はイートン校でラディカルの洗礼を受け、オックスフォードに進まないという反抗で父親に逆らった。女性問題でさらに父親の怒りを買ひ、父は彼に四百五十ポンドの年収しか遺さなかった。しかし悪妻に苦しめられた兄の急死は、エヴァアラードに千五百ポンドの年収をもたらした。おまけに彼は身長があり、清潔で明朗な外観にくわえて、「耳を愛撫するような声」の持ち主だった。ローダの相手役として、ギッシングは目にも耳にも官能的な美男子を選び、「心から体へ」を示唆している。エヴァアラードは「女性らしさに関する限り、未知のものではなく」(第十章)、目の前にいるローダを見て、いわゆる美人ではないとしながら、秀でた額、知的な唇、長い睫毛などを仔細に眺め、均整の取れた体、うっすらと静脈の浮く白い肌へと視線を泳がせ、彼女を「欲望を理性でコントロールできる成人男性の、現代文明によって強化された欲望の象徴」(第十三章)と見なし、次第にローダを狙うべき獲物に変えていく。ローダを名実ともに「新しい女」と見て、好感を持ち評価する目はあるものの、「彼女の顔には処女と書いてある」と見る意識は、彼が「新しい男」にはなりきれない尻尾の痕跡を思わせる。

一方ローダには、「相思相愛の夫婦なんて、一万組に一组も

いない」、「結婚は知性の結びつきであって、生活の手段ではない」、「結婚は待ち望むものではなく、避けるべきもの」という結婚観がすでにあり、その根底にはむしろ「どうして男性は馬鹿と結婚するのか」、「本当に独身の男がいるのか？」（第六章）といった男性観があり、自分の夫になる男には「しみ一つない誠実」（第二十五章）を求める自分を知っていた。そして同じ第二十五章、ローダが休暇で訪れた海辺の小村を舞台とするエヴァアードの自由恋愛とローダの正式な入籍結婚をめぐる応酬は、とどのつまり、たがいのセクシュアリティを賭けた「支配」と「被支配」の図式に陥って決裂する。だがこの海辺の小さな村は、ローダに揺るがぬ人生の設計図をあらためて認識させる場となった。

夫の愛——そしておそらく子どもたちの愛。それだけでは嫌だ。……何らかの知的な仕事に実質上従事すること、何らかの「運動」に協力する——いや、指揮すること、自分と同時代の一大転換期にある生活と関わりを持つこと……私が了解しているような女性の解放に対し、エヴァアードが本気で共感しているか否かは疑問だ。

（第二十五章）

この願いと疑いは、いまも女性の心を二分している。ローダの言う「女性の解放」、つまり男性の真剣な共感を得た「女性の解放」が実現することはあるのだろうか。ローダの前に広がっ

ている不安は、時代や歴史をよせつけない男女の差異または人間存在の根源に横たわる不安のいいであろう。エヴァアードの中にこれを見たかのように、彼女は一人ロンドンにもどる。そこに待っていたのは、二度ともどるまいと思ったチエルシーのあの部屋だった。

懐かしい寝室に入ったときの感じは非常に不思議だった。……部屋匂いが、悩みと希望のうちにすごした長い時間を思い出させ、彼女は吐き気がし、憎しみの余り逆上して、自分の人生のほとばしるような流れに足を踏み入れ、その清らかさを濁した男を呪った。……この男に対する恋を打ち砕くことができなければ、私は毒を飲んで死ぬ。……そうして、彼の虚栄心を満足させていいのか？ この男への愛のために、知情ともにめつたにないほど卓越した資質を持った女が、一匹のネズミみたいに死んだのだという一生の思い出を彼に与えるのか？

（第二十七章）

これがゴドウィン・ピークの眠れぬ夜に匹敵するローダ・ナンの徹夜の瞑想である。「私の人生のほとばしる流れに足を踏み入れて、その清らかさを濁した男」、これこそローダの、そして「新しい女」の独立宣言ではないだろうか。男女が対等な人間であるということが、この二人の男女の眠れぬ夜で示されている。女性の財産権や離婚法や婦人参政権が実現しても、女性

の人生には眠れぬ夜が一再ならず訪れる。ローダという「新しい女」は、その苦い杯を呑んで見せた新しいヒロインだった。ギッシングはローダによって、女性の自立の映像化を果たしたとも言えるだろう。ここには、「一人で、または友人たちとともに暮らし、家族のしがらみや、男の支配や監視から独立する権利」を働く中産階級の女性たちに認定し、「郊外の妻たちを窒息させるような結婚を避ける最善の道」は、「栄光ある独身女性」としてのライフスタイルを開拓することだ」と示唆するギッシングがいて、リギンズは解説している (Ullrich 121)¹⁵。とはいえ、結婚という亡霊は出没するのをやめることはなく、夜空が白むまで眠れない夜が必ずまたやってくる。

ギッシングは一八九三年、友人のベルツに宛てた手紙にこう書いている。

人生の悲惨の大半は女の無知と幼稚さに原因がありますね。……こうした事態は、まさしく教育の欠如によるものです。イギリスの解放された女性の中には、素晴らしい人がたくさんいます。そうした人は女性の美点を何一つ失うことなく……知性の面で（また道徳の面でさえ）多くのものを得ている人たちです。僕は典型的な女の粗野な愚かさによって気も狂わんばかりの思いをさせられました。こういった女は消滅するか、とにかくごく少数になってもらわねばなりません。それを達成する唯一の道は、いわゆる性のアナキーの期間を経ることでしょう。

これは本論で最初に見たメアリ・ウルストンクラフトの思想の再確認にはかならない。メアリ・バーフットの学校経営も同じ理念で始めたもの、メアリとローダは「女性の解放」という目標に向かって再びタッグを組んでいくだろう。結婚後のエヴァラードは無為の夫にもフラヌールにもなるだろうから、妻のアグネスが家を出て、ストリート・ウォーカーになる可能性がないとは言い切れない。

こうしてメアリとファニーという、ありふれた名を持つ女性たちが哀しみや反発によって語り伝えてきた「新しい女」の問題は、マーセラ、シドウェル、ローダといった特異な名前を持つ女性たちがそれぞれに遭遇した「新しい体験」によって深く掘り下げられ、人間と時代を読み解き、数々の忘れ得ぬシーンになってひとまず結実した。いつの時代であれ、どんな社会であれ、必ず起きる地殻変動は、周辺を居場所とする女性によってまず感受され、そこにまた「新しい女」が誕生する。この意味で時代を先導する役割を持った「新しい女」は、永遠に連鎖する宿命にあると言えるのではないだろうか。

ちなみに、二〇〇五年九月十八日付けの『タイムズ』には、「キャリアガールたちが若いツバメブームに沸いている」という記事が出て、八歳以上若い男性と結婚する女性の割合がこの二十年で倍増し、「女性の解放 (female emancipation)」と「高給

が得られるキャリア」がその二大要因であるとあった。続いて二〇〇六年四月十六日付けの同紙には、「『新しい女』は家庭の主婦」という特集記事が掲載され、その小見出しは「解放されたキャリアたちは家庭生活を選ぶ」であった。「新しい女」は二十一世紀にも生き残り、時代の変貌を映していくようだ。

註

- (1) 武田美保子『《新しい女》の系譜』(彩流社、二〇〇三年)から多くの教示を受けた。
- (2) 富山太佳夫『シャロロック・ホームズの世紀末』(青土社、一九九七年)七七、八八頁。
- (3) メアリ・ウルストンクラフト『女性の権利の擁護』(白井堯子訳、未来社、一九八〇年)三二七頁。
- (4) Gillian Beer, *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction* (London: Ark Paperbacks, 1983) 210-13.
- (5) バンクス夫妻『ヴィクトリア朝の女性たち』(河村貞枝訳、創文社、一九八〇年)三八頁。
- (6) メアリ・ウルストンクラフトの生涯については、山上正太郎『フランス革命とひとりの女性』(社会思想社、一九九七年)を参照。
- (7) Barbara Hardy, "The Objects in Mansfield Park" in *Jane Austen Bicentenary Essays*, ed. John Halperin (Cambridge: Cambridge UP, 1975) 134. 「ファニー・プライスはヴィクトリア朝のヒロインたちを先取りしている」とあり、「東の部屋」を本篇の心臓部として

論議している。

- (8) クレア・トマリン『ジェイン・オースティン伝』(矢倉尚子訳、白水社、一九九九年)一一七頁。オースティンはラクロを読んでいただろうとしている。

- (9) 「渦」を「姦通」というテーマで読んだ拙論「渦」——ギッシングと姦通小説」『ギッシングの世界』(英宝社、二〇〇三年)を参照されたい。

- (10) エイザ・ブリッグズ『イングランド社会史』(今井宏・中野春夫・中野香織訳、筑摩書房、二〇〇四年)三七二、三七八頁。

- (11) 富山太佳夫『笑う大英帝国』(岩波新書、二〇〇六年)六五頁。

- (12) George Orwell, "George Gissing" in Coustillas, *Collected Articles* 51.

- (13) Pierre Coustillas, introduction, *Born in Exile*, by George Gissing (Brighton: Harvester, 1978) xii.

- (14) 上の「二重の意識」(第一部第三章)は時代の現象として多くの批評家が言及している。なかで Jenny Bourne Taylor, "The Strange Case of Godwin Peak: Double Consciousness in *Born in Exile*" in Ryle and Taylor, *George Gissing: Voices of The Unclassed* 61-75 に詳しい論述がある。

- (15) 『ヴィクトリア朝の女性たち』には、「独身でとどまることはかつては恐るべき運命であったが、次第に多くの女性が自立の喜びを発見するようになるにつれて……好んで独身を選ぶようになった」(一四五頁)とある。